

平成22年6月18日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19730502
 研究課題名 (和文) 戦前生活綴方における教育評価の理論と実践に関する研究
 研究課題名 (英文) Educational Evaluation of the “Seikatsu-Tsuzurikata”
 (life composition) before the World War II
 研究代表者
 川地 亜弥子 (KAWAJI AYAKO)
 大阪電気通信大学・工学部・准教授
 研究者番号：20411473

研究成果の概要 (和文)：

この研究では、戦前生活綴方の指導と評価の系統について、以下のように分類可能であることを提示した。

- (1) 表現指導と生活指導の関係を明らかにしたもの。
- (2) 子どもの生活や表現に対する意欲を重視するもの。
- (3) 同じような生活環境(「生活台」)を持つ子どもたちの作品を系統的に編集した作品集としてのもの。

これらは、現代のポートフォリオ評価のように、子どもの作品やパフォーマンスの評価の系統を模索している評価法に対して示唆を与えるものである。

研究成果の概要 (英文)：

I analyze the educational evaluation theories and practices of Seikatsu-Tsuzurikata (life composition) in 1920s-1930s, and classify clear the three system about guidance and evaluation.

The first system is based on the relation between guidance of life and compositions. The second is based on “ambition-centered” guidance and evaluation. The third is the collections of works, in which children in similar life express actual feeling and worry.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	270,000	2,270,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：生活綴方、作文教育、教育評価、系統表、小砂丘忠義、国分一太郎、佐々木昂、村山俊太郎

1. 研究開始当初の背景

本研究は、戦前生活綴方における教育評価の理論と実践に関する研究である。戦前生活綴方史研究は以下のように進展してきた。

1950年代には、新興教育—教育労働者組合の運動との比較を通じて、ファシズム教育体制下における「抵抗の教育運動」の一つとして位置づけられることが主流であった（駒林邦男「ファッション的教育体制の本格的展開と北方性生活綴方運動」海後勝男、広岡亮三編『近代教育史Ⅲ 市民社会の危機と教育』誠文堂新光社、1956年。「抵抗の教育運動」宮原誠一編『日本現代史大系 教育史』東洋経済新報社、1963年など）。

1950年代半ばごろから、生活綴方は文章表現技術指導の枠を超えて、普遍的な教育方法的価値を有したものと位置づけられ、「生活綴方的教育方法」として他の教科指導、生活指導に広められるべき方法として注目された（小川太郎・国分一太郎編『生活綴方的教育方法』明治図書、1955年。大田堯・寒川道夫『生活綴方的教育方法の発展』明治図書、1957年など）。大田堯は、「公教育と生活綴方」（『思想』1958年9月）において、生活綴方における学習集団の組織論と認識の発展、および学習意欲の問題をとりあげた。さらに、「生活綴方の根本問題としての『生活と表現』（『作文と教育』1959年10月）において、「生活と表現」の間にある緊張関係に注目し、この中に生活綴方固有の人間形成の契機があると指摘した。その一方で、戦前の生活綴方は、科学的な教材を系統的に付与することが不可能な状況で開拓された教育方法であるため、科学的系統的な教材による学習を子どもに保障することによって、教育の過程をよりゆたかにしていくことができると指摘した。

1960年代には、宮坂哲文（『生活指導の基礎理論』明治図書、1962年など）、小川太郎（「生活綴方と教育」小川太郎・国分一太郎編『生活綴方的教育方法』1955年、竹内常一（『生活指導の理論』明治図書、1969年など）らによって、集団主義教育研究の立場からの生活綴方研究が深められた。また、志摩陽伍は、戦前の遺産について、「生活と表現」のあいだにある「認識」の問題として考察を深め、子どもの認識の問題と、綴る題材の系統性に注目して分析した（志摩陽伍「北方性教育運動の遺産に学ぶ」『生活指導』1966年8月。志摩陽伍「教科研究の視点」『教科経営の創造 小学校三年生』国土社、1969年など）。

このように、問題史的に進められてきた生

活綴方史研究を、通史的段階へと推し進めたのは、中内敏夫であった。中内は、生活綴方の教育方法上の特徴を「子どもにひとまとまりの日本語の文章を書かせる過程をとりたてて教育方法のうえに重視する立場の歴史的に特殊なあり方」（中内敏夫『生活綴方成立史研究』明治図書、1970年、p. 13）として、生活綴方と「書くこと（文章表現）」は切り離して論じることができないとした。さらに、中内は、戦前の生活綴方を、子どもが生活に取材してありのままに書くことを励まし、綴られた作品に寄り添って指導し、子どもたちと読みあうという指導過程を持っていたことによって、アメリカのエバリュエーションの理論の導入によらずに、子どもの自立を助けるという立場から既存の価値体系を問いなおすという教育評価概念を成立させたものとして位置づけた。

この中内の研究は、制度史が中心であった教育評価史研究においても、新たな研究領域を拓いたものといえる。中内は、民間教育史研究をふまえて、綴方教師たちが従来の評価観では十分な指導を行えないことに気づいた結果、新しい質をもった指導と評価の体系を模索した点に注目して、日本における教育評価の源流として生活綴方を取りあげたのである。ただし、中内は近代的な評価論の枠組み（とりわけ到達度目標・評価論）から生活綴方における教育評価論を抽出することを試みており（中内敏夫「『学力』論争の回顧と展望——生活綴方・到達度評価・公害学習」『教育』第408号、1982年2月）、生活綴方における教育評価の理論と実践について、その内在的な論理に即して明らかにすることに成功していない。教育評価とは、実践について記録し、判断・吟味するいとなみである。教育評価の理論と実践について明らかにするには、どのような資料、記録を用いたのか、すぐれた成果（作品）として取りあげられているものは何か、判断・吟味する際の規準や特徴はなんであったのかについて明らかにする必要がある。とりわけ、生活綴方のように、一つの理論的支柱に基づいて実践されたのではなく、教育実践との緊張関係の中で理論を構築していった運動の内実を明らかにするには、理論と実践との関係を検討することが重要になろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、主に以下の3点である。

(1) 表現技術の系統性に準拠した作品批評と、その枠におさまらないもの（個々の子

もの個性や暮らしぶりなどの判断)をふまえての作品批評の関係について、綴方教師たちがどのように統合的に(もしくは矛盾・混乱したまま)理論化し、実践していたかを明らかにする。綴方教師たちはこの問題について、1920年代末から議論を続けており、申請者のこれまでの研究成果に、村山俊太郎、近藤益雄、木村文助らの分析を加えることにより、より多層的に彼らの議論を捉えることができるであろう。これは現代の教育評価論における工学的アプローチと羅生門的アプローチの関係の解明に対しても、一定の示唆を与えると予想される。

(2) 子どもの認識と表現と生活を、作品批評を通してどのように評価し、教育の改善に反映したのかに注目する点である。北方の教師たちの間では、作品批評において貧しい生活を生き抜く「意欲」と、それを含みこんだ知性(「生活知性」)の評価が重視された。申請者はこれまでの調査で、この「意欲」の評価が1937年ごろから変化しているとの仮説を立てている。今後、この変化の具体的様相(たとえばよいと評価される作品例と指導の変化など)を明らかにし、その変化をもたらした要因について分析する。この分析は、近年、教育現場での実践的な研究が進められている、子どもの生きる力の育成と関心・意欲・態度の評価に対して、一定の示唆を与えるであろう。

(3) 指導と評価の系統化について明らかにする。厳しい現実を生きる子どもたちの作品を読む中で、「純真さ」を重視する子ども観や、既存の学校の価値体系へ疑問を持つようになった綴方教師たちは、無評価論や評価必要悪論に陥らずに、目の前の子どもたちにふさわしい価値や指導の体系を模索した。それは同時代の他の教師たちが作成した系統案(たとえば東京高等師範学校附属小学校の教師が作成した系統案や、『赤い鳥』系の人物が作成した系統案など)と比較すると、どのような特徴を持っているのだろうか。調査する教師たちの系統案はいかなる性格を有し、教師自身がその系統案をどのように評価していたのか明らかにする。

3. 研究の方法

1920-30年代の綴方教師として、小砂丘忠義(高知)、佐々木昂(秋田)、加藤周四郎(秋田)、村山俊太郎(山形)、国分一太郎、木村文助(北海道)に注目し、資料の分析を行う。さらに、児童向け学年別綴方雑誌『鑑賞文選』(1925-1930)とその後継誌『綴方読本』(1930-1937)が復刻されたため、これを分析対象に加え、小砂丘忠義および関係者の誌

上の批評について分析を加える。未公刊・未復刻の文書類については、遺族および関係者の許可を得て可能な限りデジタルカメラで撮影し、重要なものについてはデータベース化する。

4. 研究成果

(1) 研究成果の概要

戦前生活綴方における指導と評価の系統を、大きく分けて以下のように分類可能であることを提示できた。①表現指導と生活指導の関係を重視した系統。②子どもの生活や表現に対する意欲を重視した系統。③同じような生活環境(「生活台」)を持つ子どもたちの作品を系統的に編集した作品集を提示した。これらは、戦前の綴方教師それぞれの作品批評に対する問題意識が反映されたものである。その一方で、現代のポートフォリオ評価のように、子どもの作品やパフォーマンスの評価の系統を模索している評価法に対しても示唆を与えるものである。

これらは、以下の生活綴方運動における教育評価の理論と実践の分析より明らかにしたものである。

(2) 小砂丘忠義の教育評価論

小砂丘忠義(1897-1937)は、故郷の高知県で1917年から8年8か月の教員生活を送った。そのころ、芦田恵之助(1873-1951)の随意選題綴方と、友納友次郎(1878-1945)の課題による綴方との間で論争が起き、それを受けて飯田恒作(1885-1941)、田中豊太郎(1895-1977)らが綴方指導系統案を模索していた。小砂丘は、これらの主張にはほとんど影響を受けず、子どもが教師から独立して考え、表現できることを重視して、模範文からその子らしさへと評価規準を転換していた。集団による合評作業においても、教師も子どもも等しく一人一票を投じて批評した。さらに、自らの主張を具体化し、子どもたちの自己評価を育てるものとして、独自の通知票を作成していた。

上京し、編集者となってからは、綴方を通して評価されるのは子どもではなく、教師や教科書、教育制度などであるという「全教育合力の上に立つ綴方」論や、純真さよりも生活に根ざしたたくましさこそ本来の子どもらしさとする「原始子供」論、さらには、学校における優劣の規準に対する疑義など、大正期の実践に基づいた教育評価論を発表した。ところが、1936年半ばごろから作品批評における表現技術重視の立場を打ち出した。これは、小砂丘が生活を切り拓く技術として表現技術を捉えなおした結果、表現技術指導の

不十分な実践に対して警鐘を鳴らしたものと考えられる。

(3) 北方教育社における作品批評論と教育評価論

北方教育社は発足当初から1932年頃まで、評価の主体は教師であるとの主張はされたものの、独自の作品批評の根拠を持つには至らなかった。滑川道夫は、作品批評について、文学的価値に基づく「本質的批評」と教育的価値に基づく「指導的批評」を統一したものだとして述べた。しかし、「本質的批評」の規準や、二つの批評の関係についてなど、重要な論点が未解決のままであった。

その後、佐々木昂（1906-1944）が、リアリズム綴方教育論を中心とした作品批評論を展開した。彼は、綴方指導において「個のリアリテ」にまで手を伸ばすべきであり、そこから生き方の問題に「はみ出す」ことは当然の帰結であると捉えた。その中で、表現以前の問題として、子どもの生活認識と、自分の悩みや感じたことをありのままに表現できているかが作品批評の観点になると主張した。そのため、子どもの「個のリアリテ」を無視するような指導や調査、評価に対する批判意識が強かった。また、作品批評は、子どもの「個のリアリテ」が知性と意欲によって普遍的・社会的な方向へ発展することを目指して行うべきだとした。「標語」（作品に短い言葉で付された評）については、子どもの成長を表すものと、学級集団における相対的な位置を示したものを合わせて付すことを求めた。しかも「標語」だけで子どもたちに作品を返すことを戒めていた。さらに、北方にふさわしい系統案は、北方の子どもたちの作品によって示されたものであると提起し、独自の系統を模索していた。

加藤周四郎（1909-2001）は、作品批評とは子どもの認識と表現と行動の自由を保障した上での全人評価であることを主張した。さらに、受け持ちの教師こそが作品批評の主体であり、そのために子どもの生活をよく把握すべきであることを示した。同時に、加藤は子どもが自らの要求と認識の主体になるために必要な表現力を保障すべきであると主張し、実態を把握するために基礎的学習内容の習得状況を調査していた。このとき、加藤は当時の調査法で流行していた正規分布曲線は用いずに、今後の指導に対して示唆を得られるように内容を具体的に文章で記述していた。

村山俊太郎（1905-1948）は、作品批評において子どものリアリズム（生活のリアルな認識と表現する技術）とそこに現れる積極的意

欲性を重視する立場をとっていた。さらに、児童詩の領域で、この理論に対応する指導系統案を作成していた。

しかし、今井誉次郎から、意欲を重視するあまり子どものリアルな認識を妨げていないか、表現技術の指導に重点をおくべきではないかと批判を受ける中で、子どもの必要に根ざした表現技術の指導の重要性を主張した。さらに、積極的意欲性の評価だけでなく、批判精神とヒューマンイズムの評価に力を注ぐようになった。また、教師が自らの「教養」をもとにして社会のあるべき方向を探求した上で、現実の問題を批評すべきだとした。当時の「教養」論は、個人の内面に限定され、行動との関係を軽視していたのに対し、村山は「教養」とは社会に参加して生きる力であるとした。村山において「教養」とは、教師の生き方と深く関係し、教育実践の原動力となり、教育実践によって支えられるものと位置づけられた。

国分一太郎（1911-1985）は、作品批評について、文学的価値を重視する「文壇的批評」ではなく、作者の表現要求と、表現の発展に即した「教壇的批評」であるべきだと提唱した。綴方指導は、あくまでも子どもの生活勉強、生活行動のために行われ、そこに表現指導も位置づけられるとして、綴方指導系統案を作成し、教育的指導としての綴方指導の系統化を試みた。

ところが、1937年ごろから、綴方の役割を表現技術指導に限定する発言を行い、綴方を他教科と並列の関係におき、生活指導についても他教科と同等でよいと述べた。この主張は、子どもの表現と認識と生き方の指導を分断し、綴方を単なる表現技術の指導に解消する危険性もあった。しかし、教科の系統性と生活性に関する研究が実現可能な場合には、子どもの生活と表現に根ざす系統案を一步深めるものとなる可能性もあったといえよう。

(4) 今後の課題

木村文助の遺稿『綴方概論 — 一作文校長の遺稿』（手書き原稿）の電子データ化が挙げられる。遺稿は北海道森町図書館で保管されており、状態はよいが、推敲箇所が多いことと、鉛筆での修正跡などは写真撮影データでは読めないため、再度北海道森町図書館に訪問し、資料閲覧、データ化を進める必要がある。

また、データ化と並行して、木村文助における教育評価の理論と実践の分析を進める必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 川地亜弥子 「戦前生活綴方における教育評価論——作品批評と指導の系統化に焦点をあてて」『教育目標・評価学会紀要』、査読あり、第18号、2008年11月、pp. 27-37。

[学会発表] (計5件)

- ① 川地亜弥子 「生活を綴ることの意義——村山俊太郎の生活綴方論から考える」作文教育研究大会、於活水高校(長崎県)、2009年8月1日。
- ② 川地亜弥子 「現代の教育と生活綴方」京都市つづり方の会、於京都市教育文化センター、2009年4月18日。
- ③ 川地亜弥子 「戦前の綴方教師の理論に学ぶ——国分一太郎の指導と評価の系統化を中心に」京都市つづり方の会、於京都市教育文化センター、2008年4月27日。
- ④ 川地亜弥子 「戦前生活綴方における教育評価の理論と実践に関する研究」教育目標・評価学会研究大会課題研究、於大阪経済大学、2007年12月1日。
- ⑤ 川地亜弥子 「戦前の綴方教師の理論に学ぶ——村山俊太郎の作品批評論を中心に」京都市つづり方の会、於京都市教育文化センター、2007年4月21日。

[図書] (計1件)

- ① 川地亜弥子 「生活指導における言語の問題——言葉を通じてつながり合い、生活を変える実践」(単著) 日本教育方法学会編『教育方法 38 言語の力を育てる教育方法』担当節 第Ⅱ部第1節、図書文化、2009年、pp. 84-97。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川地 亜弥子 (KAWAJI AYAKO)
大阪電気通信大学・工学部・准教授
研究者番号：20411473

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし